

新川和江の植物表現

—— 比喩的意味と戦争詩における役割 ——

藤 本 ま ど か

春

わたしはもう悲しむまい

あけびも、どうだんも

藤も 楓も 八手も 楓の木も

みんな忘れずに芽をふき出した朝

親しいものがいちどきに訪れた

輝かしい恵みの春だもの

それにもまして これはどうであらう

寒い冬の日に伐りたはされて

庭の隅に横になつたまゝの

銀杏の幹から 枝から

こぼれる様に芽をふいた此の青いものは！

ああ ひとよ

かの樹木らの偉大なる生存力を讃へよう

すべてが息をふきかえした恵みの春に涙を流さう

過ぎ去つた陰惨な冬の日の苦しみは

もう言ふまい

暗い夜はすでにあけ

今や地上は明るい輝きに満ちた春の朝だ

雨上りの空気のやうに

しつとりと重量のある大気の中で

みどりのかげに胸をたかならせ 心ふるわせ

ひとよ

わたしはめんどりの様な理屈ぬきの情熱で
希望と親愛の卵を抱きしめる

(新川和江『睡り椅子』プレイアド、一九五三)

一 はじめに

「戦争」と「植物」は一見関係が薄遠いように見える。ところが、「植物」が日常を共にする存在であると強く認識している詩人・新川和江にとっては、これら「植物」と「戦争」は不可分の関係にあると考える。

新川和江は一九二九年(昭和四)に茨城県結城市に生まれた現代詩人である。高等女学校在学中に隣町に疎開していた西條八十に師事し、一九五三年に第一詩集『睡り椅子』を刊行した。一九八三年には吉原幸子と季刊詩誌『現代詩ラ・メール』を創刊し、また、ラジオ、テレビ、新聞での詩の選者を務めるなど多岐に渡り文学活動を展開していたが、二〇二四年(令和六)八月一〇日に逝去した。

新川の詩は、多面性、流動性を持ち合わせ、矛盾も抱えているが、その中には核となるものが確実に存在している。その核を構成するものの一つが、新川独自の植物観であると考えられる。そして、その植物観は、言葉一つ一つに重みを与え、生命力に溢れた作風を生み出している。しかしながら、新川の植物

観に焦点を当てた先行研究は管見に入らない。本論は、その新川の植物観に支えられた「戦争詩」^①である「春」(『睡り椅子』)に注目する。新川の植物観の特徴は、植物と人間が同列であり、共に日常を過ごす存在として共生観を抱いているという点にある。その植物観に基づいて詠まれた詩の中でも、特に「春」は特別重要な作品であり、戦時中を「寒い冬の日」と表現し、戦後の再スタートとこれからへの希望を芽吹き春と重ねて詠んでいる。筆者は、「春」を英訳し海外の人々に伝えたいと考えている。本論ではその前提として、新川の植物観を具体的に明らかにし、それを踏まえて「春」の読解を試みる。

二 新川の植物観

「春」が収録されている『睡り椅子』を中心に、新川の詩作全体を通しての植物観を検討するところから論を始めた。

筆者は、新川の詩作品で詠まれている植物を抽出し、表現方法の分類とテーマの分類を行った。それによると、新川の植物表現には、(1)植物名が具体的に示される、(2)特徴的な比喻表現が見られる、(3)山、川などの他の自然表現と比べて植物表現が頻出する、という三つの大きな特徴があるといえる。それぞれの特徴について順を追って具体的に見ていく。

第一の特徴は、新川の詩では、植物が具体的な植物名で詠まれていることである。例えば、『睡り椅子』で詠まれている植物を列挙すると次の通りである。

樹木（椎、榆、槻、はん、楓、八手、銀杏、鈴懸（プラタ
ン、プラタナス）木蓮、ミモザ、藤、卯の花、どうだん、
あけび）

野草（すみれ、れんげ、芒）

庭花（ストック、水仙、カンナの花、ダリヤ）

薔薇（薔薇、荊）。

多くの植物が具体的な植物名で詠まれていることから、新川の植物観を読み取ることができる。

列挙した植物は、樹木、野草、球根（庭花）、薔薇の四種に分類でき、地下を意識させる植物が多い。樹木は人間が見えない深い地下で根を張り巡らせ、球根や野草は毎年地下で球根や根を増やし広がる。植物地下との絶対的な繋がりは、自然において植物のみが持つものであり、植物は地上と地下の分断を繋ぐ存在であろう。その地下との繋がりは、境界なき世界の重要な要素である。

空や海など上空を共有するだけではなく、自分たちが踏み締めている地面が、自分の知り得ない、想像すらできない場所だ誰かも踏み締めている地面であり、その人と繋がっている印象を持たせる。地下の繋がりの意識は、新川の生命力溢れる作風の根幹と思われる。

このように、具体的な植物名が挙げることは、新川の抱く植物イメージを鮮明にし、読者にそのイメージが伝わりやすくなっている点にも注目したい。

さらに、新川の詩（『睡り椅子』、『ブック・エンド』）から植物に関する単語（葉、枝なども含む）を抽出してみたところ、二〇〇六単語が確認できた。その中の七八六単語が具体的な植物名である。これは植物に関する単語の約四割にあたり、高い割合であると言える。植物名を知らなければ、それを詩の中で詠むことはできない。つまり、新川は植物に対して特別に強い関心と知識を持っているのである。

第二の特徴は、独自の比喩表現である。新川の比喩表現は、萬葉集研究者の稲岡耕二の言葉を借りれば「前擬人法」の要素を多分に持ち合わせているのである。「前擬人法」は、一般的な擬人法、つまり人間以外の存在や抽象的な概念を人間のような特徴や感情を持つ存在として表現する方法を用いた表現とは異なっている。擬人法を用いた植物表現では、植物は人間化され、感情や行動を付与されている。つまり、擬人法においては、植物はあくまで「人間の感情を説明するための比喩的存在」であり、自発的的感情は持っていないという認識が根底にある。しかし、新川の「前擬人法」では、植物を自発的的感情がある、生命あるものとして人間と同列的なもの、ひいては人間以上の存在とする認識に基づいている。

例を挙げると、「木」³では、「野原にすつく³と立っている／あのポプラの木のところへ／吹いてゆくのです／感じやすい心を持った／優しいお兄さんのように／ポプラは わたしのなやみごとを／すっかり聞いてくれるでしょう／ひらひら ひらひ

ら／かぞえきれない緑の耳をそよがせて」（第二連）と、ポプラの木を、悩み事を聴いてくれる存在として詠んでいる。また、「自叙伝」でも、自身の成長を温かく見守ってくれる存在として樹が詠まれている。自分が生まれる遙か昔から、世界を構成し続けている植物と同じく、自分も自然の一部であり、同じ世界を形成する一端を担っているのだという意識を読み取れる。さらに、「わたしも咲きたい」^⑤では、新川の「憧れ」の感情を明確に読み取ることができる。

ショウジョウバカマ

ショウジョウバカマ

雪の下で

春を待ちつづけた心が

燃えに燃えて

あかくなったのか

さびしい冬に

どのくらいじつとかまんをしていたら

そのように美しくなれるのか

教えておくれ

らいねんこそは

わたしも咲きたいのだ

光のまなざしを一身にあつめ

空にも 人にも 愛られたいのだ

教えておくれ

ショウジョウバカマ

と、自分もショウジョウバカマのように咲きたいと願い、「教えておくれ ショウジョウバカマ」と呼びかけて教えを請うている。このことから、植物を一つの生命として敬慕していることがわかる。新川は植物を人間のように表現しているのではなく、植物を人間と同じく生きているものとする意識があり、これまで脈々と世界を形成し続けてきた「植物」という存在に対する敬仰（敬慕）の念を抱えていることが読み取れる。

新川は、「前擬人法」を積極的に用いることで、植物を生命あるものとして人間と同列的（same category）なものの、ひいては人間以上の存在として表現している。そこには「植物は人が擬人法を用いることで詩の中で生命感を与えられているのではなく、そもそも生命を持って生きているものである」という意識がある。このように新川は、自分が生まれる遙か昔から、世界を構成し続けている植物と同じく、自分も自然の一部であり、同じ世界を形成する一端を担っているのだという意識を読み取れる。

第三の特徴は、山、川などの他の自然表現と比べて植物表現が頻出することである。新川は自然の中でも、山や海ではなく植物を突出して多く詠んでいる。それは植物が新川にとって最も身近な自然であるためと思われる。植物は山、海、街中、全ての場所に存在する。場所により種は違えども、どこにでも当たり前に存在することが他の自然とは異なる植物の特徴である。

言い換えれば、植物は全ての人間が「日常」を共にするものである。

人間は「日常」を共にするものの中から、何を「自分が日常を共にする存在」として見出すかにより、それぞれの日常を表わすが、新川にとってはそれが植物であつたと考えられる。

以上の三つの特徴によれば、新川にとって植物は、季節を表現するためのものでも、単なる感情表現の道具でもなく、もっとも身近な、自分と同じように生命あるものであり、自分の「日常」空間から、そこからは見えない「世界」を想い、「世界」とつながることを可能にしてくれる存在であると考えられる。そして、新川が想う「世界」とは「人の世界」を超えた、自然すらも抱え込んだ非常に大きな広がりのあるものである。

三 「春」の独自性と植物の比喩的意味

新川の詩では通常、植物は「社会的象徴性」を担うものとなっていない。新川は植物の「社会的象徴性」に大きな価値を見出していいのである。転居すればそれに伴い詠まれる植物も変化する。植物はあくまでも「日常」を共にする存在として詠まれている。

ところが、その例外が第一詩集の『睡り椅子』に収録されている「春」である。筆者は「春」を英訳するために、植物の考証、および英語圏の植物との比較を行った。その中で、「春」の植物が、新川の他の詩とは異なり、「社会的象徴性」を強く

帯びていることに気づいた。⁶⁾

「春」に詠まれている植物は、新川の他の詩と比べると特殊である。「春」で植物名が出ているのは、あけび、どうだん、藤、楓、八手、楓の木、銀杏である。身近な植物を具体的に名前を示して詠むのが新川であるが、どうだん、楓、八手の三種は、新川の全詩作品を通して「春」でしか読まれていない。その特殊性は「社会的象徴性」と深く関わっていると見られる。

「春」の植物と「社会的象徴性」の組み合わせとしては、①柔軟性…あけび、藤、②日本的な植物…どうだん、楓、③聖性…銀杏、④呪力と戦争…八手、⑤生命力と安心感…楓の木、が考えられる。

まず、①柔軟性…あけび、藤であるが、これら蔓性の植物に対するイメージは新川の「男の声」という戦争に関わる散文詩にも見ることができる（傍線は筆者。以下同）。

「前略」校庭を開墾して下級生が植えた南瓜が、礼法室の窓下まで蔓を伸ばし、繁茂していた。「中略」むっくり、起ちあがる人の気配がして、南瓜を一個、左手に高々とかざした男が、こちらに向かつて笑いかけてきた。「敗戦祝いだねえ!」。「中略」五十年たった今も、つい昨日耳にしたばかりのように私は、男の声を思い出す。純粹とはいうものの無知でしかなかった女学生の私に、ものについての考え方の多元性を教えてくれた男、その時点での私には想

像すらし得なかった、民主主義という新しい時代がはじまる、その突っ端で聞いた、あの男の声を。⁷⁾

この作品の蔓を伸ばして繁茂する南瓜は、「新しい時代の始まり」を象徴するものとなっている。新川にとつての「新しい時代のはじまり」は、「多元性」のもとに成り立っている。そうであるとすれば、南瓜のしなやか蔓は、「多元性」を支える「柔軟性」を表していると考えることができる。

新川が「春」で、あけび、藤といった蔓性の植物を詠んでいることには、「新たな時代をどう生きるのか」という自問と決意が込められているのであろう。

②日本的な植物…どうだん、楓。どうだんも楓も、紅葉を楽しむ庭木として庭や寺院に植えられることが多い。新川の故郷である茨城県結城市を実地踏査したところ、どうだんは、釈迦堂、孝顕寺、安穩寺、大輪寺、慈眼寺に、また、楓は、称名寺、孝顕寺、弘経寺、安穩寺、下華蔵寺、みどり町緑道公園、結城小学校、結城市本町城跡歴史公園、大谷瀬結城家御廟、大勝寺、乗国寺、鹿窪鹿窪運動公園、山川新宿結城寺、慈眼寺、東持寺、釈迦堂に見ることができた。

この二つの植物は植物の生態と文化的側面から極めて日本的である。紅葉の美しさから庭木として伝統的に愛好されてきた。特に楓は古来より「紅葉狩り」などの鑑賞や文学、特に和歌にも詠まれている。紅葉を愛でる慣習は日本では定着しており、

その最たるものが楓なのである。

③聖性…銀杏。銀杏は「春」で詠まれている植物の中で、唯一伐り倒されている植物である。

戦争と伐木の関係として直ちに想起されるのは「供木」である。一九四三年二月に軍需造船供木運動（国民運動）が始まり、供木・献木が呼びかけられていた。しかし、供木の樹種は、広葉樹はけやき、かし、たぶ、しほち（しおじ）、針葉樹はまつ、すぎ、ひのき、ひば、えぞまつ、もみ、つが、であり、銀杏は供木の対象ではない。⁸⁾ 銀杏は木質が柔らかいことと、防火帯としての役割が期待されていたため供木を免れたのである。すなわち、戦争（軍需造船供木運動）において銀杏は伐り倒される木ではなかった。

「春」で詠まれている「楓の木」はけやきであり、むしろ「楓の木」が伐り倒されていたというならば戦争下としては自然である。しかし、「春」で伐り倒されているのは銀杏である。それは、聖性をもつ銀杏が伐り倒されているのを詠むことに意味があったからであると思われる。日本において銀杏は聖性をもつ植物と見られていた。

『図説・花と樹の事典』によれば、銀杏は留学僧によって持ち帰られ、「中国（唐）からの有難い植物」として神社仏閣に植えられたとされたという。⁹⁾ 歴史の中で「神社仏閣に植えられている樹木」として定着し、年を経るごとに「中国から伝来した」という側面は薄れ、宗教（精神）との繋がりが強い植物と

して文化の中で確立されたと考えられる。

また、銀杏は樹齢が長く、耐火性もある。銀杏には、関東大震災や空襲をはじめとする火災から人々を守護してきた歴史があり、東京都墨田区、飛木稲荷神社のご神木の銀杏は、空襲によって完全に焼けて黒焦げの幹のみが残ったが、わずかに残った一部の根や幹の細胞が再生し、五年後に芽を吹き出した。⁽¹⁰⁾ 銀杏はその耐火性の強さによって、防火帯の街路樹としても多く植えられている。このような銀杏を生命力の象徴と見ることは自然なことである。

樹齢が長くなると乳房のようなコブができ、そのコブに触れると子宝に恵まれる、という子授け銀杏や子育て銀杏と呼ばれる伝説も存在する。⁽¹¹⁾ このような耐火性や生命力は人が聖視するには十分なものである。

なお、結城市での植物分布としては、以下の場所に確認することができた。称名寺、孝顕寺、弘経寺、安穩寺、みどり町緑道公園、結城小学校、玉岡日姫の墓、結城市本町城跡歴史公園、大谷瀬結城家御廟、小田林金光寺、小田林頼福寺、粕礼長徳院、結城市役所、住吉神社、浦町健田須賀神社、大栄寺、中長命寺、結城寺。

それにしても、聖性を持ち、戦火から多くの人の命を守った木が伐り倒されて放置されているという状況は異常である。供木ではなく、聖性を持ち、戦時中に人や建物を火の手から守る役割のある銀杏さえも伐り倒されていることは、戦争というも

の無残さを表現していると考えられる（なお、銀杏が高木であったならば、空爆の目標とされることが恐れられ伐り倒されたのかもしれない）。

④呪力と戦争…八手。常緑の八手は魔力を追い払う力、邪鬼の侵入を防ぐ呪力ある植物とされ、実用性も相まって昭和時代には庭に広く植えられた。⁽¹²⁾

さらに、八手は戦争とも関わりのある植物である。「昭和三〇年代における庶民の庭の植物利用―東京都台東区谷中の事例―」⁽¹³⁾のによると、茨城県では、七つや九つに分かれた葉が多い八手の、八つに分かれた葉を神棚に供えると戦争に行った人が戻ってくるとされていた。

出身がやはり茨城県である新川にとつても、八手は戦争をイメージさせる植物であったのではなからうか。「春」で詠まれている植物の中で八手だけが常緑樹であるが、常に変わることない緑ではなく、新たな芽吹きを詠んでいることに注目したい。常緑で呪力があると認識され、戦争とも関わりのある八手の芽吹きを詠むことは、戦争による「陰惨な冬の日」が終わり、「輝きに満ちた春の朝」がきた、世界の再生（更生）を表していると考えられる。

⑤生命力と安心感…楓の木。楓の木は日本の代表的な広葉樹の一つであり、自生する他、寿命が長く育ちやすいため、公園樹、往路樹に多い。楓は古名であり、現在の名は樺である。

楓の木は『睡り椅子』の詩「美しき楓の大樹をうたふ―此の

樹、わが村の中央にそびゆ。何百年経たる大樹なりや、古老にきけどさだからず―」でも詠まれており、結城市では、大桑神社の櫻、結城小学校、乗国寺、光明寺、称名寺、聡敏神社、田間光明寺で楓の木が確認できた。住む街に生えている樹木として、新川には馴染みがあったと思われる。

堂々と立ち、芽吹いている楓から感じとるものは生命力だけでなく、軍需造船供木運動で伐り倒されていた楓の木が変わることなくどっしりと立っていることで日常が戻ってきた安心感ということもあるに違いない。

四 植物表現から見た戦争詩としての「春」

以上の個々の植物が表す〈社会的象徴性〉を踏まえて、戦争詩としての「春」についての読解を試みたい。

「春」には戦争を直接的に表現した言葉はない。しかし、「倒れた銀杏」、「陰惨な冬の日の苦しみ」が、戦争がもたらした苦しみや悲しみを表現している。

植物表現によって創り出されている空間は、空間的形象でありながら時間的形象でもある。それぞれの植物によって作り出された別々の空間が、同じ瞬間にそれぞれの場所で芽吹くことによって個々の空間が繋がりを、繋がった一つの世界をイメージさせる。

しかし、実際の芽吹き時期は、あけび―三月中旬―四月中旬、藤―三月―四月、楓の木―四月、楓―三月―四月上旬、八

手―五月、どうだん―五月―六月中旬、銀杏―三月中旬―四月中旬、と必ずしも同時ではない。すなわち、「みんな忘れずに芽を吹き出した朝」は、現実の情景ではない。

また、新川が「春」で詠んでいる植物は、戦前・戦後を通じて新川身近に存在した植物であり、それらを詠むことは新川にとっては「日常」を詠むことであったと思われる。

ただの芽吹きではなく、「日常」を共にし、〈社会的象徴性〉をもつ植物たちが一斉に芽吹く描写によって、新川は「日常が戻ってきたこと」と「新たな時代の始まり」を表現したのである。

さらに、全てのものに平等に訪れる「朝」と「はじまり」の時間の共有によって、地域や国境を越えたすべての国、そこに住む人々、植物、動物、分離されている空間で生きている全てが繋がっていることを感じさせる。そして、その繋がりを強めているのは、「樹木らの偉大なる生存力」(第三連)という言葉から連想される樹木の地下の根なのである。

第四連と第五連で繰り返される「ひとよ」という呼びかけは、「わたしたち」という呼びかけとは異なり、「全世界の人類」という印象を持っている。「ひと」に国、立場、思想や宗教による区別や境界はない。その全てへの呼びかけは、全ての人間が経験する「春の芽吹き」の植物表現に支えられて、苦しみの中から希望へと歩みだす世界中の「春」を浮かび上がらせる。

個人的象徴性を持った「日常」に加え、それぞれの植物が持つ〈社会的象徴性〉も意識されていることが、この戦争詩にお

ける非常に重要な点である。この詩でしか詠まれない植物から、この作品のメッセージ性を読み取ることができる。「意識的に社会的象徴性を含めた植物表現」によって戦争を表現した「春」、強力なメッセージ性をもった、敗戦直後の「新川の戦争詩」であった。

五 新川にとつての戦争詩と「春」の意義

戦争詩としての「春」の重要性を論じてきたが、そもそも新川が戦争詩を詠むことは稀である。同時代の詩人茨木のり子と比較すると明確である。茨木は三三五編の詩作のうち、戦争に關する詩が四二編あるが、新川は一〇二編のうち、『睡り椅子』所収の「PRAYER (一)」「PRAYER (四)」「春」、『けさの陽に』所収の「男の声」、『名づけられた葉なのだから』所収の「骨も帰ってこなかった」、『ブック・エンド』所収の「ぶうぶう紙を…」の六編にすぎない。

これら六編を俯瞰することによって、戦争詩としての「春」の意義をさらに明らかにしたい。六編は、制作時期によって、(1)敗戦後まもない時期に詠んだ詩と、(2)戦後ある程度時間が経ってから詠んだ詩に二分できる。一九五三年刊行の『睡り椅子』の三編は敗戦直後、「男の声」は戦後五〇年程、「骨も帰ってこなかった」、「ぶうぶう紙を…」は戦後六〇年以上経ってから詠まれている。詠まれている時期が極端に分かれていることには大きな意味があると思われる。

(1)敗戦後まもない時期の新川の戦争詩は、婉曲的な比喩表現を用いた詩であったり、あるいは戦争を直接的に表現した場合には、戦争被害や平和を強調した呼びかけではなく、祈りの形を用いた独白的表現もしくは神への呼びかけの詩となったりしている。

戦争詩について、松島淨の「戦後詩ノート——吉本隆明と戦後詩」⁽⁹⁾で「戦争詩だからと言って戦争体験を強調したり平和思想をうたわなくても優れた戦後詩は書けるということである」と述べたように、戦争の残酷さや悲しみを激しく表現したものだけが戦争詩ではないと筆者も考える。

例えば、茨木のり子の「準備する」と比較すると、その特徴はより明瞭になる。その第二連、第三連は「そう／たしかに地下壕のなかで／見知らぬひとたちとにがいパンを／分けあったし／べたべたと／誰とでも手をとって／猛火の下を逃げまわった」、「弱者の共感／蛆虫の共感／殺戮につながった共感／断じてなつかしみはしないだろう／わたしたちは」と激しい感情表現となっている⁽¹⁰⁾。

このように戦争を直接的に表現する茨木に対して、新川の戦争の表現と感情の吐露は穏やかで、婉曲的である。

加えて、この敗戦後まもない時期の新川の戦争詩は、戦争の被害者、加害者としてではなく、「日常を壊された者」として戦争を詠んでいる。新川にとつての「日常」は植物と共にあり、戦争詩は植物表現を通して壊された「日常」を形象化している。

一方で、(2)戦後時間が経ってから詠まれた戦争詩は、敗戦後まもない時期の戦争詩と比較すると、表現が明瞭である。三編の詩ともに戦争を想起させる単語や「戦争」という言葉が直接的に用いられ、表現の仕方も感情的になっている。また、「戦争にとられた」や「骨も帰ってこなかった」という「戦争被害者」としての言葉も目に付く。

この表現の変化は、世代の変化と社会情勢が関係しているであろう。『けさの陽に』が刊行されたのは一九九七年で、新川が六八歳の時である。戦時中女学生だった新川も七〇近い歳になっている。戦争経験者が確実に減っているという状況下で詠まれた戦争詩なのである。

そもそも「戦争をしてはいけない」というメッセージは、新川にとってはその世代に語りかけるべきものではなかったと思われる。戦争を一つの経験としてそれによって起こる、言い表せないような複雑な感情を共有していた世代は、「戦争」を全面的に出した詩でなくとも、「言うまでもなく戦争はしてはいけない」という強い意志のもと共感し理解し合うことができたと考えられる。

しかし、戦争を経験していない世代には、戦争はどこか他人事であり、「戦争はしてはいけない」という意識がもはや無条件の前提ではなくなっている。すなわち、詩の読者が、「戦争はしてはいけない」ことを前提とする世代から、「戦争をしてはいけない」をメッセージとして受け取る世代へと変化してい

る。後期には子ども向けの詩を詠んでいることもあり新川は、この時期には、戦争をはっきりと言語化し、かつ、なぜ戦争をしてはいけないのかを、子どもであっても明確に理解できるような詩を作りたいと思ったのであろう。

さらに、一九九七年から二〇一一年の間には、地下鉄サリン事件、アメリカでの同時多発テロ、イラクでの戦争、北朝鮮の核実験など、戦争やそれに関連した暴力的な出来事が多く起こった。こうした社会に対する不安と危機感がこの時期の新川の戦争詩に色濃く表れているとも考えられる。戦争詩の詠み方の変化は、戦争を経験した新川が、詩人として何を発信し、何を残すべきか、思考錯誤した結果であったと考えられる。

翻って、敗戦後まもない時期の新川の戦争詩は、戦争を体験したものとしての声を直に伝えるものとして注目されるのである。その中でも「春」は、身近な植物を用いて、戦争を俯瞰した作品として、独自の意義を有している。戦争は当たり前の「日常」をたちまちに破壊してゆく。それぞれの詩人たちがその様相を詩に表現したが、新川は、自分も植物も等しく自然の一部であり、同じ《世界》を形成する一部であるという植物観を基礎に、一つ一つの植物に《社会的象徴性》を付与しながら、戦争の無残さと再生への期待を穏やかに、しかし確信をもって表現したのであった。

六 おわりに

新川和江は「日常」の中で誰しもが無意識裡に感じている「死」、「生」、「愛」など人間にとって普遍的なものの本質を言語化することが巧みである。その言語化は身近に存在するものを媒体とする。その中でも最も有力な媒体が植物である。

ただし、「媒体」と言っても、新川にとって植物は「擬人的」に人間を表現するための道具ではなく、自分と同じく生命あるものであり、同列、もしくはそれ以上の存在である。その意識のもと、「前擬人法」的な植物表現によって、植物はそれぞれの生命を持ち、さらにその一つ一つが集まり、交わるることによって広い〈世界〉の繋がりを表現するものとなっている。それは、「境界無き世界観」という言うことができよう。

また、戦争に対して寡黙であった新川の六編の戦争詩には、新川の切実な思いが込められている。穏やかな口調でありながら、敗戦後まもない時期には、「日常」を壊す戦争を凝視し、戦後時間が経ってからの時期には戦争を知らない世代に「戦争をしてはならない」ことを伝えようとする。その中でも特に独自の意義を持つのが「春」である。新川は、「春」において、「日常を奪われた者」として、俯瞰的視点から戦争を見つめている。その俯瞰的視点は、新川独自の植物観を基礎に、個々の植物に〈社会的象徴性〉を託すことによってもたらされている。それは、「戦争」と「植物」を結び付ける稀有の試みであった。

文学作品は作者の自己表現でありながら、人間の本質を表す普遍的なものである。人間の本質を可視化したものが文学という一つの形であり、その本質は世界中に通ずるものである。文学は互いを理解し、世界をより多角的に見ることができると可能性をもつ。

今後の課題として、海外の詩人の植物表現と比較研究を行うことで、世界的視野で「植物」・「戦争」・「人間」の関係性について考えていきたい。なお、新川の「春」の英訳の研究と実践については、別の機会に発表する予定である。

注

- (1) 本論での戦争詩は「戦争に関することを詠んだ詩」という意。
- (2) 「前擬人法」は「融即的な自然感情の濃密な投影」であり、「自然との濃密な融合交感的な心情表現」を言う（稲岡耕二『万葉集の歌人と作品』第一章二・前擬人法的表現―人麻呂歌集の自然感情―、岩波書店、一九八五年）。なお、「融即」とは、フランスの哲学者・社会学者・文化人類学者ルシアン・レヴィ＝ブリエルが諸民族に見出した思考法。別の物や現象が、別のものでありながら同じものと知覚すること。原語Participation「分有」とも訳す。
- (3) 新川和江『野のまつり』教育出版センター、一九八七
- (4) 新川和江『絵本「永遠」地球社、一九五九
- (5) 新川和江『ヤァ！ヤナギの木』教育出版センター、一九五八
- (6) 英訳については、別稿にて発表する予定である。

- (7) 新川和江『けさの陽に』花神社、一九九七・六
 - (8) 瀬田勝哉『戦争が巨木を伐った―太平洋戦争と供木運動・木造船』平凡社、二〇二一
 - (9) 木村陽二郎監修、植物文化研究会編『図説・花と樹の事典』柏書房、二〇〇五・五
 - (10) 唐沢孝一『よみがえった黒こげのイチヨウ―命を守り震災や被災を伝える樹木』大日本図書、二〇〇一・六
 - (11) 秦寛博『樹木の伝説』新紀元社、二〇一・八
 - (12) 長澤武『野外植物民俗事苑』ほおずき書籍、二〇一二・九
 - (13) 総合研究大学院大学文化科学研究科『総研大文化科学研究』第一七号昭和三〇年代における庶民の庭の植物利用―東京都台東区谷中の事例―二〇二一・四
 - (14) 松島浄『戦後詩ノート―吉本隆明と戦後詩―』『明治学院大学社会学・社会福祉学研究』一五五、明治学院大学社会学部二〇二〇・二
 - (15) 茨木のり子『茨木のり子詩集』現代詩文庫(二〇)一九六九・一
- 〔依拠した新川和江の作品のテキスト〕
- 『睡り椅子』(ブレイアド、一九五三・七)、『絵本「永遠」』(地球社、一九五九・二)『ひとつの夏 たくさんの夏』(地球社、一九六三・九)『ローマの秋・その他』(思潮社、一九六五・七)『比喩ではなく』(地球社、一九六八・五)『つるのアケビの日記』(詩

学社、一九七一・六)『日本の詩集二〇新川和江詩集』(角川書店、一九七三・一・二)『明日のりんご』(新書館、一九七三・九)『土へのオード一三』(サンリオ出版、一九七四・四)『新川和江詩集』(現代詩文庫、思潮社、一九七五・二〇)『火へのオード一八』(紫陽社、一九七七・九)『野のまつり』(教育出版センター、一九七八・二二)『夢のうちそと』(花神社、一九七九・二)『水へのオード一六』(花神社、一九八〇・七)『渚にて』(沖積舎、一九八二・六)『新選新川和江詩集』(新選現代詩文庫、思潮社、一九八三・六)『ヤァ! ヤナギの木』(教育出版センター、一九八五・七)『いっしょうけんめい』(フレール館、一九八五・九)『ひきわり麦抄』(花神社、一九八六・六)『新川和江』(花神ブックス、花神社、一九八六・二二)『青春詩篇…幼年少年詩篇』(花神社、一九八九・三三)『はね橋』(花神社、一九九〇・五)『春とおないどし』(花神社、一九九一・三三)『星のおしごと』(大日本図書、一九九一・四)『湖の庭から』(花神社、一九九三・七)『続・新川和江詩集』(現代詩文庫、思潮社、一九九五・七)『けさの陽に』(花神社、一九九七・六)『地球よ』(岩崎書店、一九九七・二〇)『はたはたと頁がめくれ』(花神社、一九九九・四)『わたしは、此処』(花神社、一九九九・八)『いつも どこかで』(大日本図書、一九九九・二〇)『新川和江全詩集』(花神社、二〇〇〇・四)『これはこれは』(野見山晁治絵、玲風書房、二〇〇〇・九)『お母さんのきもち』(小学館、二〇〇一・六)『生きる理由』(花神社、二〇〇二・八)『新川和江詩集』(ハルキ文庫、

二〇〇四・三)『それから光がきた』(理論社、二〇〇四・一〇)『人
体詩抄』(玲風書房、二〇〇五・五)『新川和江全詩集』(花神社、
二〇〇〇・四)『名づけられた葉なのだから』(大日本図書、二〇
一・三)『千度呼べば』(新潮社、二〇一三・九)『ブック・エ
ンド』(思潮社、二〇一三・一〇)

〔主要参考文献〕〔参考文献〕

アト・ド・フリス『イメージ・シンボル辞典』大修館書店、
一九八四

雨宮昭一『占領と改革…シリーズ日本近現代史七』岩波書店、
二〇〇八

飯島泰男監修、山田誠編『構造用木材の強度試験マニュアル』、
(公財)日本住宅・木材技術センター、二〇一

稲岡耕二『別冊國分學・万葉集辞典』學燈社、一九九一・八
茨木のり子『茨木のり子詩集』現代詩文庫、一九六九・一

角田清文『「いまください」の詩人―新川和江小論』『詩学』
四〇(七)、詩学社、一九八五・七

唐沢孝一『よみがえった黒こげのイチヨウ―命を守り震災や戦
災を伝える樹木』大日本図書、二〇〇一

木村陽二郎監修、植物文化研究会編『図説・花と樹の事典』柏
書房、二〇〇五・五

黒岩隆『やすらえ花や新川和江ノート』『詩学』二九(八)、
詩学社、一九七四・八

小原二郎『木の文化をよめる』NHKブックス、二〇〇三

小松靖彦「詩の分析法」(<https://manyogakushiji.wixsite.com/mysite/database>) 二〇一三・一一・一〇参照

鈴木庸夫『樹木図鑑』日本文芸社、二〇〇四・四

瀬田勝哉『戦争が巨木を伐った―太平洋戦争と供木運動・木造
船』平凡社、二〇二一

高野哲司『昭和三〇年代における庶民の庭の植物利用―東京都
台東区谷中の事例―』『総研大文化科学研究』第一七号、
二〇二一・四

中央公論新社編『少女たちの戦争』中央公論新社、二〇二一

寺田寅彦『日本人の自然観』岩波文庫、岩波書店、一九四八
・一一

飛田範夫『庭園植栽の禁忌』J・JTLA 六〇(五) 日本造園学
会、一九九七

『詩と思想』土曜美術社出版販売、二〇一九・三月号
中村昇『木材工業』六五(六)、日本木材加工技術協会、
一九四六

長澤武『植物民俗』法政大学出版局、二〇〇一・一

長田敏行『イチヨウの自然誌と文化史』裳華房、二〇一四・二
並松信久『日本文化の自然観に関する試論―その系譜と共生思
想―』『京都産業大学日本文化研究所紀要』第二六号、
二〇二一・三

日本民話の会・外国民話研究会編訳『世界の花と草木の民話』
三弥井書店、二〇〇六・七

戦争と文学編集室編『戦争と文学』案内』コレクション戦争と文学別巻、集英社、二〇一三

野村純一・松谷みよ子監修、小堀光夫・花部英雄編『いまに語りつぐ日本民話集・伝説現代民話①木や草の伝説』作品社、二〇〇三

秦寛博『樹木の伝説』新紀元社、二〇一

濱野周泰『大人の園芸庭木・花木・果樹』小学館、二〇〇六・三

平田喜信、身崎壽『和歌植物表現辞典』東京堂出版、一九九四

平林 秀元『新川和江論』『詩学』二九（八）、詩学社、一九七四・八

フロランス・ビュルガ『そもそも植物とは何か』田中裕子訳、河出書房新社、二〇一

水口洋治『新川和江論』『A Study on Shinkawa Kazue, a Modern Poet』巻1011001111

水口洋治『新川和江論』『甲子園短期大学紀要』巻11111001111

水口洋治『新川和江論』『甲子園短期大学紀要』巻11111001111

水口洋治『新川和江論』『甲子園短期大学紀要』巻11111001111

水口洋治『新川和江論』『甲子園短期大学紀要』巻11111001111

宮内泰之「恵泉、樹の文化史…ドウダンツツジ」『恵泉女学園大学園芸文化研究所報告「園芸文化」第三号、二〇〇六・五

横手一彦「戦時期文学と敗戦期文学と」坂口安吾「戦争と一人

の女」『昭和文学研究』三九巻、一九九・九

渡辺一夫「公園・神社の樹木」築地書館二〇一・二二

『産経新聞』自作再訪「完成感がないから、これまで続けてきたのかもしれない」(<https://www.sankei.com/article/20151130-ECCWS65NRBL4BKQXCQ5265W3A/4/>) 二〇一・六・一六参照

「消防防災博物館」(<https://www.bousaihaku.com/discover/4348/>) 二〇一・一・三〇参照

「新川和江コレクション」結城市民情報センター・ゆうき図書館

「全国木材検査・研究協会『jitra』」(http://www.jitra.jp/jas_11-D.html) 二〇一・一・三〇参照

「東京国立博物館情報アーカイブ博物館譜」『本草図譜』一八二八 (https://webarchives.tnm.jp/info/b/meta_pub/sresult)

「日本木材総合情報センター『木net』」(<https://www.jawic.or.jp/woods/sch.php?nam0=icyou>) 二〇一・一・三〇参照

ゆうき図書館ホームページ (<https://lib-yuki.city.yukig.jp/manage/contents/upload/6026118ca0df11.pdf>) 二〇一・六・一六参照

(ふじもと・まどか／本学大学院博士前期課程)